

ボルノーにおける

「ディルタイ思想」解釈の一考察レジュメ

——「体験・表現・理解」概念に着目して——

梅光女学院大学 広岡義之

周知のごとく、ディルタイ (W. Dilthey, 1833-1911) においては、精神科学の基礎づけの問題が終始一貫したライフワークとなったが、そこでは人間の精神生活はいつでも「全体」が第一義的なものであり、それは一つの構造連関 (der Strukturzusammenhang) として捉えられていた。発展は構造連関を基礎としてのみ可能となる、と言われる所似でもあろう。全体としての構造連関こそが、私たちの生の現実であり、個々の精神活動を規定しているわけで、それはけっして人間の思惟によって構成されるものではないから、私たちがこの人間の構造連関を具体的に把握する可能性は、それを分析し、記述する以外に方法は存在しない、と考えられる。ディルタイはこのような仕方で事象を認識することを、従来の自然科学的認識における、仮説を立ててする「説明」に対して、「理解」として特色づけている。それでは表現と理解の関連はどのようなものであるのか。人間の精神生活は自己自身を外的世界で表現する必然性をもっている。人間は表現することにおいて、自己を完成させてゆく。このように、精神生活の表現として実現される外的なものの中に表現されている内的なものを把握することが理解の方法に他ならない。ここでの理解とは、表現の理解のことであり、また表現とは体験の表現のことである。われわれの体験的事実、また精神生活の体験は、元来、知覚や表象・判断・感情などが互いに内面的に結合して構成されている。こうした人

間の体験を、その本質から捉えるためには、先述の「理解」という認識形態によるほかはない。

このディルタイ自身の論述の方法は、あらゆる一面的な誇張を避け、簡略化した図式や要約を極度に嫌う傾向があり、またそこから彼独特の慎重な表現を生み出す結果になった、とボルノーは考えている。しかし本稿ではディルタイ自身の基本的態度の詳細な提示は、ある程度無視せざるをえなかった。その代わり、ボルノーの眼を通して、ディルタイ自身の断面的な思想を再検討することで、そこに存する意義や矛盾点を可能な限り明瞭に描き出すことが本稿の目的とするところである。そのため、ディルタイ思想の中核の一つである「体験・表現・理解」概念から展開されるべき、精神科学的教育学もしくは解釈学的教育学の可能性については本稿では触れることはできず、今後の課題としなければならない。

A Study on the Interpretation of

“Dilthy’s Thought” by O.F. Bollnow

•••An Aspect of the Concept of

“Experience, Expression and Understanding”.

Baiko Jo Gakuin College

Yoshiyuki Hirooka

As is generally known, the problem of laying the foundation of the Geisteswissenschaft (spiritual science) is consistently the lifework for W. Dilthy. In the spiritual life of human being, “the whole” is always the most important fact, and it is grasped as a “structural-relevancy” (der Strukturzusammenhang).

It is said that the development becomes possible only when it is based on the structural-relevancy. Only the structural-relevancy as the whole is the reality of our life, and it prescribes each spiritual activity. We think that the structural-relevancy is not constructed by the thought of the human being. Therefore the only possibility of concretely grasping the structural-relevancy of human being is to analyze it and describe it. Dilthy characterized recognizing a phenomenon in such a way as “understanding” (verstehen), as opposed to “explanation” which had been done by building up a hypothesis as in usual natural scientific recognition. What is the relationship between “expression” and “understanding”? The spiritual life of human being has inevitability to express himself in outside world. Human being accomplishes himself in

giving expression to his feelings. Thus, the method of “understanding” is nothing but grasping the internal in external expressions that is the realization of the spiritual life. Here understanding means understanding of expression, and expression signifies the expression of the experience. Our experiential fact or our experience of the spiritual life consists of internal connections between “a sense perception” and “a symbol”, “a judgement”, and “feelings”. The only way to essentially grasp such an experience of human being is by the form of recognition as “understanding”, as previously stated.

Bollnow believes that the method of argument by Dilthy himself has a strong tendency to dislike simplified schema or summary and to avoid every one-side exaggeration, resulting in his own particular careful expression. But in this paper, I must ignore the detailed presentation of the fundamental attitude of Dilthey himself to a certain extent.

Because the purposes of the present paper are, by reexamining a fragmentary thought of Dilthy through Bollnow's point of view, to depict its significance and contradictions as clearly as possible. Therefore, I do not discuss on the possibility of the geisteswissenschaft (mental science) or hermeneutisch Pädagogik (interpretative education) which should be developed on the concept of “experience, expression and understanding”, one of the central concepts of Dilthy's thought. This possibility would be the problem to be solved.

ボルノーにおける「ディルタイ思想」解釈の一考察

——体験・表現・理解概念を中心に——

広岡義之

一 問題の所在

周知のごとく、ディルタイ (W. Dilthey, 一八三三—一九二一) においては、精神科学の基礎づけの問題が終始一貫したライフワークとなったが、そこでは人間の精神生活はいつでも「全体」が第一義的なものであり、それは一つの構造連関 (der Strukturzusammenhang) として捉えられていた。発展は構造連関を基礎としてのみ可能である、と言われる所似でもある。①西村皓はこの点について、ある少年の非行を例にとり、次のように説明している。たとえば「少年非行」という一つの現実も、たんに表面的に特殊なものとして捉えられてはならない。その少年の背後には、非行という行為をせざるをえなかった複数の事情が存

在し、その行為発生の原因を探究するならば、その少年の精神生活・社会的・家庭的・心理的環境などの要素が複雑に絡み合っており、非行にはしらざるをえなかったことが判明するだろう。こうした全体としての構造連関こそが、私たちの生の現実であり、個々の精神活動を規定しているわけで、それはけっして人間の思惟によって構成されるものではないから、私たちがこの人間の構造連関を具体的に把握する可能性は、それを分析し、記述する以外に方法は存在しない、と考えられる。「ディルタイはこのような仕方で事象を認識することを、従来の自然科学的認識における、仮説を立てて『説明』に対して、『理解』として特色づけた」②が、これは今日ではすでに有名な言説となつて

いる。ただし、デイルタイが念頭においていた自然科学のイメージは、一八七〇年頃は存在したが、現代の物理学においてはもはや現存しない、とのボルノー(O. F. Bollnow, 一九〇三—一九九一)の指摘も忘れてはなるまい。⁽⁶⁾

さらにデイルタイは、精神科学の関わる領域は、個人・家族からさらには国家・文化体系や人類全体へと、つまり人間的・社会的・歴史的状况すべての範囲を含むものと捉えたうえで、この範囲のすべての根底には絶えず人間の精神的営みが関与している、と考えている。デイルタイの表現を借りれば、それは人間の生の「現われ」(die Lebensäusserung)として存在する。

それを「端的にいえば、社会、国家、教会などのような諸制度、さらには芸術、科学、哲学など、彼(デイルタイ)のいうところの客観的精神(der objektive Geist)ないし生の客観態(die Objektivität des Lebens)は、すべてこれ精神生活の表現である。」⁽⁷⁾ということになる。

それでは表現と理解の関連はどのようなものであるのか。人間の精神生活は自己自身のうちに自分を外的世界で表現する必然性をもっている。人間は表現することにおいて、すなわち内的なものが外的なものと結

びつくことによって自己を完成させてゆく。「このように、精神生活の表現として成立する外的なものを手がかりとしてその中に表現されている内的なものを把握することが理解の方法なのである。」⁽⁸⁾ここでの理解とは、表現の理解のことであり、また表現とは体験の表現のことである。われわれの体験的事実、また精神生活の体験は、元来、知覚や表象・判断・感情などが互いに内面的に結合して構成されている。こうした人間の体験を、その本質から捉えるためには、先述の「理解」という把握形式によるほかはない。

そこで本稿の目的は、主にボルノーのデイルタイ解釈を基軸として、体験・表現・理解というデイルタイの主要概念を分析したうえで、ボルノーのデイルタイ批判を通してうきばりにされてくるデイルタイ思想の独自性とともな彼の矛盾点や限界を描き出すことにある。それゆえ、デイルタイの思想に大きく依拠してきた精神科学的教育学にとって、特に「理解」概念がどのような意味をもつか、という重要な考察は本稿では展開できず、別の機会にゆずらざるをえない。

二 体験と理解の関わり

それでは、デイルタイにおける体験と表現と理解の

基本的な連関とはいかなるものなのか。理解は体験を前提とするのであり、所与のものは体験である、とディルタイは考えるが、西村によれば、体験を前提とする理解が、体験の狭さと主観性を全体的な普遍性に解放するときをはじめ、その体験は生活経験となるのである。^⑥さらにボルノーは、他者の表現が本質的に親しみを感じられるのは自己の体験の中に移し入れることができるからである、という。このディルタイの「理解に対する体験の逆行的な依存性」^⑦は次の言説へと結びついてゆく。つまり、体験は、理解が体験の主観性を超えて全体性の領域に入ることにより生の経験が成立し、ここに体験を理解から、理解を体験から漸次的に説明する関係も確立する。^⑧

ここにディルタイのいう理解の能力が言い表されていよう。すなわち、「他者の生の理解中に私自身の体験を再発見することによって、私はこの生が、私の特殊な生ではなく、その中には普遍的な核」^⑨が含まれていることを知る。換言すれば、理解とは、個人の体験の制約性を打ち破り、同時に個人の体験に生活経験という普遍性を与えるものに他ならない。つまり、体験においてわれわれが知るものは、つねに単なる特殊なわれわれ自身の生であるかのように見えるが、じつ

はむしろ、理解することによってはじめて個別的体験の拘束は止揚され、さらに個人的な体験に生の経験の性格が与えられることになる。^⑩しかしまた、たんなる体験からのみ出発する理解は、主観的恣意的なものに墮するし、逆に理解がたんに客観性を求めて抽象的形式的表現に上すべりしてしまうならば、その理解はたんなる記号としての言語に墮するであらう。^⑪

ところで、ボルノーによれば「他者の生の理解の中で、私が私自身の体験に対応するものを再発見することによって、とりあえず私自身の特殊な生についての知と思われたものが、生一般の知へと拡大されるのである」^⑫ここにディルタイのいわゆる「生の諸統一の共通性」としての経験が生ずることとなり、^⑬それゆえ精神科学において、理解は共通性によって普遍性を獲得してゆくことができるのである。

以上のように体験の第一の特徴とは、「他人の理解によって、特殊性から共通性と普遍性へと高める」^⑭ことであり、それに続いて第二の特徴は、「自己の体験の内容的な拡大」に看とれる。自己の生はつねに制約されているが故に、自己の体験の可能性はきわめて狭い領域に限定されざるをえない。しかし、「ここに他人の生の理解が登場すると、その中で自己の特殊

性の限界を超えて、人間の生の可能性の多様性の全体が、到達可能^⑮となるのである。そこで西村は次のように言う。「すなわち、他人を理解することによって自己の体験の不明瞭な所は明瞭となり、主観の狭い見解の故に生じた誤謬は改善され、体験そのものが拡大されて完成するとともに、他面では自己体験を通して他人を理解するということが可能となるのである。」^⑯と。

たとえばディルタイは、芸術の能力を上述の自己の生の拡大の方向で次のように捉えている。つまり詩人とは、理解することによって彼のすべての内的経験を他人の実存へと移行させ、その結果、詩人は自分が個人的に体験不可能な事柄を理解しかつ形態化するのである。^⑰そこでボルノーは次のように言う。「他人の生の理解によって、人間は自己の特殊な視野の一面性から解放され、全面的な生の経験へと拡大されるのである。」^⑱と。ディルタイ自身もまた「体験ははかりがたいし、体験の背後を考慮することはできない、また認識そのものが現れるのも体験をおいてほかならないし、また体験そのものに関する意識は体験そのものに伴って、ますます深まっていく。そのようであるから、この課題は果てしがない……。」^⑲と述べているとおり

である。いずれにしても、「体験と理解がもはや自己と他者に振り分けられるのではなく、むしろ理解の問題性が、体験する者自身の自己理解の中にも及んでくるような地平で論ずることによってはじめて、哲学的に決定的なものになるのである。」^⑳

三 表現と理解の関連について

ところでディルタイによれば、この自己理解もまた、体験の直接的な説明から生ずることはできず、表現という迂回路に依存しているという。ここに至って、われわれはディルタイ解釈学における理解論の表現のもつ本質的意義を見い出すのである。^㉑つまり、「人間は自分自身の表現を通じてはじめて自己自身を理解するのである。」^㉒と。たとえば、かつてわれわれがどのようにして発展して現在のわれわれになったのかを、忘れ去られた古い手紙や写真などの資料によって知ることができる場合、これはまさに「生が自己自身をその深みから明らかに知るの、つねに表現を通しての理解にまつほかないということである。」^㉓

このように、表現はある者の内部を他の者に伝えるための人間同士の交渉ではなく、自己の生の理解をも含めたすべての理解の必然的な前提条件に他ならず、

そのことによつて表現と理解の連関が真に哲学的な重要性をもつようになるのである。^②ただデイルタイは、概念以前の所与を解釈する際の一般的な問題には、対象自身の不明確な問題設定に困難が伴うという理由でとりあげることをしてしない。そこでデイルタイは、表現の中に生が固定された事柄のみを取り扱う。ここで「表現とは、問題設定の方向によつてもはや変わりえないものであり、表現という不動の形態において、自身のなかでたえず流れ去つてしまふ境界が明らかにされている。」^③ものをさす。それ故、表現は、直接的な自己理解という直接的な処置に対立するものではない。そこで体験と表現の關係をさらに厳密に区別してみると以下のようなことになる。デイルタイによれば、体験は表現を含む、あるいは、体験は完全に表現の中にとりこまれる、と考えられている。^④つまり、表現はつねに体験の全体を含んでいるのであり、「表現は、目的をもつたどのような行為とも區別され、これらよりも一段深い層へと下りてゆく。」^⑤ものである。いずれにせよ体験と表現は互いに完全に対応している、という点が重要であろう。

四 基本的理解の媒体としての「客観的精神」
ところでデイルタイによれば、理解の形式は「基本的理解」の形式 (die elementaren Formen des Verstehens) と「高次の理解」の形式 (die höheren Formen des Verstehens) の二つに区分できるのであるが、「もともと理解とは、表現の理解のことであり、また表現とは、体験の表現のことである。そしてここに彼 (デイルタイ) の解釈学における基礎概念として、体験、表現、理解という一連の概念がえられるのである。」^⑥基本的理解とは、たとえばハンマーを打ちおろす人間の行為は一定の目的が存在することをわれわれに示している、というような生の個々の表現の解釈に他ならない。ここではわれわれは、その行為を個々の生の表現とみなしはするが、それを生の連関の全体まで遡つて理解することはしない。換言すれば、各々の行為の表面的把握の段階の域を越えることはしない。すなわち、「基本的理解においては、表現と表現された精神的なものとの連関が有する共通性を媒介として、生の表現がある種の精神的なものの表現であることが、意識的な類比推理の過程を経ないで、最初から明らかとなるのである。」^⑦それゆえ、この基本的理解において理解されるものは、個々の人間というよりも、む

しる共通性という特徴を担った個々の人間に他ならぬい。

それとの関連でボルノーによれば、ここで「客観的精神」の理論の中に基本的理解の理論をはめ込むことができる、という。こうした「客観的精神」が「客観的」と呼ばれる理由は、精神科学的な理解によれば、主観から解き離され、主観と向かい合っている (eigen-über-stehen) からである。それが歴史的・文化的に制約されたものと解されると、シュプランガー (E. Spranger, 一八八二—一九六三) のいう「規範的精神」と呼ばれるようになる。^⑧ それとの関連でダンナー (H. Danner, 一九四—) はディルタイの言う「精神」と「生」の間の類似性について次のように述べている。「また、一切の『精神的』能作 (Leistung) の顕現態が文化という名で呼ばれているのであるから、あらゆる理解の媒体としての『客観的精神』というディルタイの概念は、文化という概念からもさほど隔たったものではない。」^⑨

この「客観的精神」によって、個々の生の表出の共通の基盤が回復され、そこに位置づけられ、そこからそれぞれが理解可能なもの^⑩となり、この結果、決定的な方向転換が可能となるとボルノーは確信する。つ

まり、ディルタイは「精神科学の問題設定にならって、理解の対象はつねに特殊なものである、ということから出発しながら、考察の方向が今や他ならぬ一般的なもの、われわれすべてが『浸され』ており、たがいに理解し合う場である、『共通性の媒体』へと変えられるのである。」^⑪と、ボルノーによって指摘されている。ヘーゲル (G. W. F. Hegel, 一七七〇—一八三二) から受け継がれたこの「客観的精神」は、ディルタイによって「理解された歴史的世界」とも呼ばれている。個々の生の表出、たとえば単語・文章・身振り・儀礼・芸術作品及び歴史的行為などがこの「客観的精神の王国」(ディルタイ)において理解されうるのは、ある共通性が自己を語る者と理解する者とを結びつけるからに他ならない、とボルノーは考える。^⑫人間は一人一人、この共通性の領域の中で体験し、思考し、行動することにおいてのみ理解する、と考えるならば、彼はこの生得の共通性という特定の雰囲気の中で生活し、あらゆるものの意味を理解してゆくこととなる。^⑬

「われわれは、かかる雰囲気のうちに生き、またかかる雰囲気に絶えずつまれている。…略…われわれはこのような歴史的な理解された世界の到る所に馴染んでいて (Wir sind in dieser geschichtlichen und

verständenen Welt überall zu Hause)´そして一切の事物の意義 (der Sinn) や意味 (Die Bedeutung) を理解する。われわれ自身がかかる共通性に織り込まれている」^⑧ことになるのである。

すべての理解可能なものは、たんに芸術や学問などの高度の精神的形成物のみならず、「樹木を植えた広場」や「ソファアの置いてある居間」という日常生活全般の名称にも及ぶものと考えられる。ここではもはや二人の人格の間で起こる理解の出来事が重要なのではなく、共通の媒体の「中で」の出来事が生起し、個別が会合うことこそが重要なのである。^⑨「客観的精神とは、個人間にあてはまる共通性を客観化して、感覚の世界にあらしめたいろいろな形式である」^⑩とディルタイは述べている。

五 ボルノーのディルタイ「客観的精神」批判

ところでボルノーの興味深い指摘によれば、上述の新しい理論によって、「まず個々の人間が存在して、それから両者間の理解による結合がいかに起こるか？ という問いは生ずる余地がない」^⑪ことになる。ボルノーによれば、ディルタイは九十年代に至るまで、「両者の結合が可能なのは、あらゆる人間の中に働く

何らかの力が存在しているからであり、個々の人間の差は、これらの力のもつ量的な関係によるにすぎない。」^⑫という古ぼけた理論にしがみつかなければならなかった、という。しかし現実はそのようではなく、「共通性という媒体」がまずあって、この特定の「雰囲気」の中に浸されてわれわれは存在する。換言すれば、理解が可能なのは、われわれがこの媒体の中に共通に浸されているからに他ならず、^⑬ボルノーのこうした鋭い指摘によって、ディルタイ理解の方向づけがここで決定的に転換されざるをえなくなる。つまり、「まず私が個々の人間を理解し、ここからさらに客観的・形成物の理解が可能になるのではなく、逆にわれわれは、まずわれわれを取り巻いている客観的精神という共通性を理解し、その後、いわばこの客観的精神によって、他の個々の人間を理解するのである。」^⑭と。つまり、そこではもはや個々の人間が理解されるのではなく、彼がそこで他者との共通性を思い出す世界が理解されることとなる。「それぞれの生の現われが、このように共同的なものにたやすく組み込まれるのは、客観的精神が組織だった秩序をそれ自体の中に含んでいるから」^⑮に他ならない。

換言すれば、「人間が共同体といかに関わっている

かが問題なのではなく、生きていくかぎり、人間がつねにすでに共同体の中に存在していることが問題になるのとまったく同様、この理解もまた同時に人間の根源的な本質に属している。子供が、すでに自分と世界の関係の中で自分を理解しているのは、このためである。⁴⁴この点を西村も次のように述べている。「すなわち、相互に独立な個人個人のうちに同形的な要素を認め、そして一個人が他の個人を理解できる所以を根拠づけた、あの個々のものから全体へと向かう行き方は、むしろ逆にならなければならないことになる。つまり個人個人は最初から共通性という媒介の中に生存させられているものであり、したがってこのゆえにこそ、われわれは、互いに理解し合えるのだというように、全体から個々のものへ向かうという行き方が本来のものであるように思われる。」⁴⁵と。このように、デイルタイが基本的理解と名づけた理解の形式は、個々の人間ではなく、共通性もしくは中立性をもった人間の生に関わることとなる。たとえばボルノーは次のような例をあげて説明している。ある人が笑っている姿を私が見る場合、私はそこで彼が笑っている事柄を理解し、それを「客観的精神」と解する。この特定の人間の「笑い」という表出は、共通性・中立性をもった

人間の生の中で理解されることになる。⁴⁶

ところでヘーゲルから継承した上述の「客観的精神」は、デイルタイにおいては、「感覚的世界における精神的なものの表出と同じ意味のもの」⁴⁷であったが、ボルノーはここで、デイルタイがこの概念を導入した思考過程の問題点を次の二点にみて取り批判している。第一に、私は理解されたものを「客観的精神」と解する。そのことにより、理解の可能性を自分に納得させるのだが、デイルタイの「客観的精神」概念は、生の表出の三領域（筆者註：①思考上の形成物、たとえば概念や判断の論理的理解 ②種々の行為の技術的理解 ③体験の表現の理解）のうち、根本的には、純粹な体験の表現にしか当てはまらない。それ故、この領域の理解においては、先述した「理解の中立性」という指標そのものが欠如しているのではないか、とボルノーは疑問を提出している。⁴⁸

第二にデイルタイが例に挙げる「文」「手仕事の方法」「挨拶の仕方」は、先述の生の表出の三つの形式になるほど合致してはいるものの、この三つのグループをそのまま精神的なるものの客観化として、共通なものと考えることができるのか、とボルノーは疑問を呈する。⁴⁹なぜなら、デイルタイが「体験の表現」の

具体例として、以前には「驚きの身振り」を引き合いに出していたにもかかわらず、基本的理解と客観的精神との連関の説明に際しては、「驚きの身振り」から「挨拶の仕方」に今度は差しかえて説明している点をボルノーは鋭く指摘して、そのデイルタイの置き換えには次の深い理由があるという。すなわち、純粋な驚きの身振りは人間から人間へ直接理解でき、その間の共通の歴史的媒体を必要としない。その点に関して、ボルノーは次のように述べている。「そのために、この理解（筆者註：驚きの身振り）は、まったく別の文化圏の人間同志、そればかりか動物に対しても可能なものであり、そこでは両者を結合するための、つねに歴史的なものである客観的精神は問題となりえないのである。」^⑧と。このような理由で、デイルタイは「挨拶の仕方」という「恣意的記号」のグループの例を引き合いに出さざるをえず、このために、客観的精神のなかに定着している共通の伝統の重要性は明確になるものの、一方で他ならぬ純粋な意味での表現の性格は喪失することになる。ここに至って、ボルノーは「驚きの身振り」と「挨拶の仕方」を共通に捉える一つの包括的な理論などありえないことを明らかにしたうえで、さらに次のように述べている。客観的精神の事

実ないし現実性を否認しない限り、理解可能なものの領域が「客観的精神」と名づけられたものよりもずっと広いことが明らかになる。換言すれば、「客観的精神から理解可能なものの領域全体を捉えることの不可能性が、充分証明できる」^⑨のである。

それを踏まえたうえで、ボルノーはデイルタイのいうところの「客観的精神」概念の不充分さを以下のように指摘する。つまり、一般的な生理理解と世界理解の概念を、客観的精神における理解と同じ意味にとつてはならない^⑩としたうえで、「客観的精神の現象を、むしろこの生と世界理解の中で、一つのより狭い、さらに詳細な分析を必要とする事実と考えねばならない」^⑪とボルノーは確信する。いずれにしても、ボルノーによって指摘されたこの一般的な「世界理解および生理理解」の領域は、「精神によって創造されたものの範囲をはるかに超えており、したがって、客観的精神に関して述べられた理論では、充分包括的に解決することはできない」^⑫ことになる。

六 基本的理解から高次の理解への移行

ところで理解がすべてこのような基本的理解だけに限定されてしまうならば、人間の個性の特質について

は、すべて基本的理解における共通性の背後に消し去られてしまうことになりはしないか。そこでディルタイは、理解の解釈学の主要論点として個性の把握について取り上げたのである。⁵⁵ それとの関連で、ボルノーはディルタイ本来の関心を高次の理解のうちに見ようと試みて以下のように考える。「基本的理解においては、個々の生の表出と、その意味の間の関係が問題であったが、高次の理解においては、『生の連関の全体』が関わってくる。つまり、そのさまざまの表出の全体から理解されねばならない」。⁵⁶ 基本的理解は人間の平凡な日常生活の生の連関の中に生きているものであり、「当然であるかのように人間に属していて、そのためには特別の能力など必要としない」。⁵⁷ それ故、ボルノーによれば、概念的思考を理解の最上位に置くのは本末転倒であり、むしろ基本的理解こそが、あらゆる概念的思考の大前提であるべきだと主張する。

ここでボルノーは基本的理解から高次の理解への移行の際、与えられた生の表出と理解者の内的隔絶が大きいほど、不確かさ (Unsicherheit) と「妨げ」 (Störung) が増大し、これをいかに解消するかが課題となる、と考えている。⁵⁸ いずれの場合も、体験・表現・理解の通常の連関が引き裂かれることになる。

たとえば、私が少しも予期していない時に誰かが私に對して冷笑した場合、私はなぜその人が笑ったのかその態度を理解できない。ボルノーはこの瞬間から、つまり「不確かさ」や「妨げ」が生じた瞬間から高次の理解の仕事への移行が必要になる、という。私はここで当該の人物の特殊な生活環境などを含む彼の全生活を吟味することによってはじめて、理解できなかったことを説明しようと努める。⁵⁹ そこでボルノーは次のことを確信する。つまり、「私は基本的理解が挫折し、私にもはやそれ以上理解できない事柄にぶつかる。そして理解の高次の形式が発動するのは、この理解しないという事実・に直面したとき」⁶⁰ に他ならない、と。ここで重要なのは、基本的理解から高次の理解への移行は理論的な知識欲から生ずるのではなく、生自身の必然性からであり、このように不確かさや妨害を通して初めて理解が意識化されるのである。

この点を西村も次のように述べている。「ディルタイもまたわれわれの精神生活の中心をなしている情意に對する抵抗として外界はわれわれの意識の世界の中に実在性をもつにいたる、と考えたのである」。⁶¹ (傍点筆者) と。この抵抗としての外界である社会・諸制度・諸組織という客観的精神の世界にあって、なおか

つ個性の力が内面的に加わる所に精神世界は成立するのであって、ここに高次の理解の中心課題が存するのである。⁽⁶²⁾

七 高次の理解としての個別性の理解

ところで、この高次の理解が基本的理解の不確かさから始まるという事実はもう一つの問題へと発展してゆく、とボルノーは指摘する。これまでは、基本的理解の中にある矛盾を解決するために、いつも「生の連関全体」に戻る必要があったが、このことは今や次のことを意味する。つまり、「これまでの平均性の地平ではもはや理解しえないことが、それぞれの特定の人間の表現として、理解可能となる。」⁽⁶³⁾ 重要なのは、基本的理解の吟味の中で、まさに遮断されざるをえなかった個別性の概念が、ここで前面に出てくるという点であろう。⁽⁶⁴⁾ 全体への遡及はつねに個別性への遡及であり、ここに個別性が明瞭になってくるわけで、その点をボルノーは次のように述べている。つまり、「この全体への遡及によってはおはじめて、まず一般的に人間の生のおかれている一般的な平均性の領域から、連関をもった個々の特定の形態が分離されるのである。特定の生の統一の全体へ遡及することによって、平均性と

一般性という、一般的媒体が粉碎される。この媒体は、今や連関をもった内的構造を獲得し、その中で個別性が分離されるのである。」⁽⁶⁵⁾ と。しかし、ボルノーは、「基本的理解が、平均性のなかで働いており、高次の理解においてはじめて個別性がとらえられるという、両者の関係への洞察から、自己理解の本質への一層深い洞察が生まれる」⁽⁶⁶⁾ という、上述のディルタイの見解には次のような矛盾が生ずる、と考えている。つまり、自己自身を理解するためには、人間は自己の表現を迂回する以外にないという先の論考は、直接的な生の理解と矛盾している。つまり、人間は世界と自分との関係のなかで、つねにすでに自己を理解しており、そのためには、あえてその表出を解釈する必要はないという事実と、矛盾していた。それでは自己自身についての直接的な理解と、表現の迂回の必然性の主張とはどのような関係にあるのか、という点がここで問われねばならない。これに対してボルノーは明確に次のような解答を用意している。すなわち、「表現を迂回する必然性は、高次の理解には妥当しても、基本的理解には妥当しない。言いかえれば、迂回の必然性は、自分自身をその個別性において理解する場合にのみ妥当する。要するに、私が私自身を直接理解するような

理解は、すべて基本的理解であり、この理解は、私自身をすでに述べたような平均性のなかでとらえており、これに対して、私自身を他人とは異なった、私の形態として理解する理解は、すべて表現を迂回する以外には不可能なのである。」^⑧と。

以上のボルノーの言説は、「私は直接的な自己理解のなかで私について一体何を理解できるのか、と問う時に確かなものになる。」^⑨つまり、ディルタイ自身が、「私が私を私の特殊性において見ようとする場合、私はいずれにせよ表現という迂回に頼っている」^⑩と考えるが、ここから他者の理解ではない自己理解の以下のような困難が生じてくる。それは、他者は「外」から見えるが、自己自身は「内」からしか見えないという事実であり、さらにいうならば、自己理解は他者による理解を経由して初めて可能となる、という困難が生ずる。^⑪

八 結びに代えて

以上、ボルノーによって把握されたディルタイ理解を中心に考察してきたが、このディルタイ自身の論述の方法は、あらゆる一面的な誇張を避け、簡略化した図式や要約を極度に嫌う傾向があり、またそこから彼

独特の慎重な表現を生み出す結果になった、とボルノーは考えている。しかし本稿ではディルタイ自身の基本的態度の詳細な提示は、ある程度無視せざるをえなかった。その代わり、ボルノーの眼を通して、ディルタイ自身が表面的にしか示さなかった基本線を再検討することで、そこに存する意義や矛盾点を可能な限り明瞭に描き出すことが本稿の目的とするところであった。そのため、ディルタイ思想の中核の一つである「表現と理解」概念から展開されるべき、精神科学的教育学もしくは解釈学的教育学への具体的移行の可能性について、触れることは断念せざるをえなかった。以上、われわれはディルタイの「理解」概念をボルノーに即しつつ批判的に吟味してきたのであるが、この理解は、精神科学的教育学にとってどのような意味をもつのか。また、理解はディルタイにおおきく依拠している精神科学的教育学にとって不可欠の認識行為にほかならないが、そのうえで問題は教育学にとってこの理解という行為がいかなるものとして規定されるべきなのか、という点にある。これらの視点が次の機会に、さらに深く掘下げられねばならない今後の課題となろう。^⑫

註

- (1) 西村皓著、『人間観と教育』世界書院、昭和五三年第二刷、一〇四頁参照。
- (2) 西村皓著、前掲書、一〇一頁。
- (3) Vgl., O. F. Bollnow, Otto. Friedrich. Bollnow im Gespräch, Hans-Peter Göbbeler und Hans-Ulrich Lessing, Freiburg; München: Alber, 1983. S. 57
- ホルノー著、『思索と生涯を語る』石橋哲成訳、玉川大学出版部、一九九一年。
- (4) 西村皓著、『人間観と教育』一〇三頁。
- (5) 西村皓著、前掲書、一〇五頁。
- (6) 西村皓著、『ハイムルター』牧書店、一九六六年、第一刷、一九二頁—二三頁参照。
- (7) O. F. Bollnow, Dilthey. Einführung in seine Philosophie, Leipzig, 1936, 4. Aufl., Schaffhausen, 1980. S. 169.
- ホルノー著、『ハイムルター——その哲学への案内——』麻生健訳、未来社、一九七七年。
- (8) Vgl., O. F. Bollnow, a. a. O. S. 169.
- (9) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 170.
- (10) Vgl., O. F. Bollnow, a. a. O. S. 170.
- (11) 西村皓著、『生の教育学研究』世界書院、一九八一年第一刷、一九頁参照。
- (12) O. F. Bollnow, Dilthey. S. 170.
- (13) Vgl., O. F. Bollnow, Dilthey. S. 170.
- (14) O. F. Bollnow, Dilthey. S. 170.
- (15) O. F. Bollnow, Dilthey. S. 170.
- (16) 西村皓著、『人間観と教育』一一一頁。
- (17) Vgl., O. F. Bollnow, Dilthey. S. 171.
- (18) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 171.
- (19) Wilhelm Dilthey. Gesammelte Schriften. Bd. 7. Der Aufbau der geschichtlichen Welt in der Geisteswissenschaften, 7., unveränd.-Aufl. 1979. Teubner, 224f.
- ホルノー著、『精神科学における歴史的世界の構成』尾形良介訳、以文社、一九八一年第一刷。
- (20) O. F. Bollnow, Dilthey. S. 171.
- (21) 西村皓著、『人間観と教育』一一一頁参照。
- (22) O. F. Bollnow, Dilthey. S. 172.
- (23) 西村皓著、『人間観と教育』一一一頁。
- (24) Vgl., O. F. Bollnow, Dilthey. S. 172.
- (25) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 177.
- (26) Vgl., O. F. Bollnow, a. a. O. S. 178.
- (27) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 178.
- (28) 西村皓著、『ハイムルター』一八三頁。
- (29) 西村皓著、前掲書、一八四頁。
- (30) Vgl., H. Danner, Methodologie und 'Sinn'-Orientierung in der Pädagogik, Ernst Reinhardt Verlag, München Basel, 1979.

H. タンナー著、『意味への教育』(ランゲフェルトとの共著) 山崎高哉監訳、玉川大学出版部、一九八九年第一刷、二二〇頁参照。

- (31) タンナー著、前掲書、一三〇頁。
 - (32) O. F. Bollnow, Dilthey. S. 194.
 - (33) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 194.
 - (34) Vgl., O. F. Bollnow, a. a. O. S. 195.
 - (35) Vgl., O. F. Bollnow, a. a. O. S. 195.
 - (36) 西村皓著、『人間観と教育』一一〇頁。
 - (37) Vgl., O. F. Bollnow, Dilthey. S. 196.
 - (38) Dilthey. Gesammelte Schriften. Bd. 7. S. 208.
 - (39) O. F. Bollnow, Dilthey. S. 196.
 - (40) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 196.
 - (41) Vgl., O. F. Bollnow, a. a. O. S. 196.
 - (42) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 196.
 - (43) Dilthey. Gesammelte Schriften. Bd. 7. S. 209.
 - (44) O. F. Bollnow, Dilthey. S. 197.
 - (45) 西村皓著、『人間観と教育』一〇五—六頁。
 - (46) Vgl., O. F. Bollnow, Dilthey. S. 197.
 - (47) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 197.
 - (48) Vgl., O. F. Bollnow, a. a. O. S. 198.
- なぜこの点については以下の優れた研究を参照のこと。
- 堺正之著『O. F. ボルノウにおける解釈学的認識論の特質——ディルタイ解釈学の継承とその発展を中心に』

に——』教育哲学研究、第五〇号、一九八四年、教育哲学会、三八頁参照。

- (49) Vgl., O. F. Bollnow, a. a. O. S. 199.
- (50) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 199.
- (51) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 200.
- (52) Vgl., O. F. Bollnow, a. a. O. S. 200.
- (53) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 200.
- (54) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 201.
- (55) 西村皓著、『キェルタイ』一八五—六頁参照。
- (56) O. F. Bollnow, Dilthey. S. 202.
- (57) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 204.
- (58) Vgl., O. F. Bollnow, a. a. O. S. 203.
- (59) Vgl., O. F. Bollnow, a. a. O. S. 203.
- (60) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 203.
- (61) 西村皓著、『キェルタイ』一七九頁。
- (62) 西村皓著、前掲書、一九一頁参照。
- (63) O. F. Bollnow, Dilthey. S. 206.
- (64) Vgl., O. F. Bollnow, a. a. O. S. 206.
- (65) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 206.
- (66) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 207f.
- (67) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 208.
- (68) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 208.
- (69) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 209.
- (70) Vgl., O. F. Bollnow, a. a. O. S. 209.
- (71) Vgl., O. F. Bollnow, a. a. O. S. 6f.